

『追放と王国』の構成について

松本陽正

『追放と王国』は、資料が乏しいこともあって、従来、論じられることが少なく、しかも、文体練習や anthologie の側面が強調され、過小評価されてきた。

しかし、*Les Muets* を除く5つの nouvelles が『追放』という表題のもとに配列されている1952年の plan は、当初から作品集の全体的着想が得られていたこと、『追放』という表題によって CAMUS が作品集に統一を与えようとしていたことを物語っている。また、この plan と決定稿とでは、配列に変化が認められる。したがって、決定稿の配列は、表題に付け加えられた「王国」を効果的に表現するために考案されたと想定されるのである。

われわれは、序に付した CAMUS 自身の定義に照らして、個々の作品の結末部に注目しながら、「王国」の姿をさぐってみた。そして、『追放と王国』においては、自然体験による純粹に個人的な世界は崩壊してゆくこと、身近な他の人々への広がりをはらんだ個人的幸福感が「王国」の姿として提示されていること、作品集の最後の2作品の主人公が「王国」を発見し、しかも決定稿の最後に *La Pierre qui pousse* を据えることによって、CAMUS がいっそう「王国」を強調しようとしたことを論証した。

Jonas と d'Arrast に見られるように、「王国」発見の過程で一旦孤独に陥る必要性と、彼らの「王国」がある種の「家族的結合」へと広がっている事実は、全体の構成を考えるうえで示唆に富んでいる。なぜなら、作品集の奇数に配列された主人公はすべて結婚しているのにたいし、偶数ではすべて独身者となっているからである。CAMUS は、人間の基本的絆として「家族的結合」をあげ、それと交錯させながら、人間の条件として孤独

を示し、この2つの組み合わせによって作品集に統一を与えようとしたのではないだろうか。こうした仮定にそって、作品集を2つの nouvelles の組み合わせによる A, B, C 群の3つに分け、全体的構成を考えてみた。A 群では、自己の感情や観念を絶対視する者たちの破綻が示され、その antithèse として B 群では、社会的問題に直面して、自己の感情を素直に表明できないために誤解され、破綻をきたす個人の世界が描かれている。したがって、個人的世界と社会的なるものの balance が問題となり、C 群では、自己の世界を確立し、同時に他の人々との絆を発見する主人公の姿が示されるのである。さらに、*Le Renégat* と *Les Muets*, *L'Hôte* の結末部と *Jonas* の冒頭部は鮮やかな対照をなしており、作品集が綿密な構成をとっていることが論証される。

また、*La Vie d'Artiste* と *Jonas*, *La Pierre qui pousse* の manuscrit と決定稿を比較すると、そこに、孤立性から人間的絆へと発展する主人公の姿が認められる。この変化は、戦後の一連の論争を経た後、CAMUS の内部に新たな価値観が生まれてきたことを証しているし、この姿は、『最初の人間』へと引き継がれてゆくはずだったと考えられるのである。

(広島大学博士課程)